

## (5) 基隆港

本船が基隆港の沖に着いたのが早朝 6 時であった。クォーター・マスター (Quarter Master=甲板手) がポートサイド(Port Side=左舷)のギャングウェイ (Gang Way) を下すと同時に肩に肩章 (Epaulet=エポレット) のついた制服を纏った検疫官 (Quarantine Officer) が、本船に乗船してきた。俺は Please this way. Please have a sheet sir.



先にサロンルームで待機していたパーサー、チョッサー、キャプテンが俺の顔を見ながら、一瞬<sup>けげん</sup>怪訝<sup>おぼ</sup>そうな顔をしたのが分かった。俺はすぐさまパントリーに行き、コーヒーを作って彼らのテーブルの前に丁寧<sup>まこと</sup>に差出した。

「ディスワン・オーケー?」「オーケー・オーケー。」なんだ、この会話は!

**\*注 (この頃の日本人や台湾人の英語力は大体このようなものであった。)**

彼らの仕事は船員がパンデミックス(Pandemix or Epidemix=伝染病)等に罹<sup>かか</sup>っていないかを本船から聞いたり調査したりする事であり、特に異常がない限りはパスするのである。その聞き取りが終わり、彼らは乗ってきた検疫ボートに降り立って行った。それから暫くして、パイロットボートが本船に横着<sup>あさまや</sup>けされ、パイロット (Pilot=水先案内人) が乗船して来た。パイロットがブリッジ (Bridge=船橋) に上がると本船はゆっくりと朝霧の中を基隆港に入港してゆく。



初めての外国である。古びた鉄筋コンクリートで作られた港の建屋のほぼ全てに『中共打倒』、『反攻大陸』、『大陸解放』などの四字熟語が大きく書かれている、まだここは戦時体制なのである。元々基隆港は軍港であり、大小さまざまな軍艦が港内に繋がれている。港の奥の突当り付近に日本統治時代に造られたと思しき基隆駅がどんよりとした空気の中に港に向かって建っている。本船が横着<sup>おぼ</sup>けされたのは一番奥、つまり基隆駅に近い一つ手前のバース (Berth=本船が荷役等を目的として接岸する場所) に表<sup>おもて</sup>を沖に、<sup>とも</sup>艦を基隆駅を背にして停泊した。

クォーター・マスター (Quarter Master=甲板手) がギャングウェイ (Gang Way) を再度<sup>おろ</sup>下すと肩に肩章のついた制服を纏<sup>まと</sup>ったイミグレ (Immigration Officer=移民官) 3 人が乗船してきた。彼らはパーサーからクルーリストと船員手帳と受け取ると、それら

を照らし合わせながら、何か解らないがチェックしていた。

そのあとパーサーは用意していたウイスキーや醤油などが入った土産物を渡した。

5分ぐらい経ったろうか 「フィニッシュ？オーケー？サンキュー・ベリーマッチ。」  
イミグレはコーヒーも飲まずにその土産物を持ってさっさと出て行った。続いて同じく制服を着た税関(Custom Officer=中国語で海関)がサロンルームに入ってきた。Good morning sir, Please have a sheet sir. と着席を勧めると Thank you. と言ったので Welcome sir.と答えて3名の椅子をそれぞれ引いて座ってもらった。同じようにコーヒーを出した後、彼らはカーゴ・マニフェスト(Cargo Manifest=貨物明細書)、ストーウェッジ・プラン(Stowage Plan=貨物積み付け図)、クルーリスト(Crew List=乗組員名簿)及び所持品リスト(Purcell List)などをチェックした後、またもやパーサーは用意していたウイスキーや醤油などが入った土産物を渡した。海外ではこれが常識なのか？



その後、彼らはシール・ボックスのある方に案内するようにパーサーに指示したので、パーサーは例の2階への階段下まで案内した。すると乗組員全員が昨日提出した酒類、たばこを確認し、SHEELと印刷された糊のついた紙をドアが開いたら破けるようにして張り、その上に基隆海関に日付の入ったスタンプを押し下船していった。

そのあとすぐに日本語の流暢な代理店のスタッフがこれまた神戸と同様にスタイル、顔とも素晴らしい、綺麗なチャイナドレスを着た漂亮的<sup>ピョオリャンダ シャオチエイ</sup>小姐(かわいい女の子の意)二人を連れてサロンルームに入ってきた。彼女たちも処女航海で基隆港への初入港の記念として金色に輝く宝船と額に入った水墨画を持って来たのだ。それを可愛い笑顔でキャプテンに手渡した。キャプテンも満面の笑みを浮かべながら<sup>シェーシェー</sup>謝々と日本語と同じような発音で彼女らと握手をしているのである。これは役得である。代理店のスタッフは小姐を返した後フォーマンを連れてまた引き返してきた。彼らは早速チョッサーの部屋に入り、荷役の打ち合わせを始めた。

表では大きな声で喧嘩をしているような声が各所で聞こえてくる。俺は表のデッキのほうへ何が始まっているか確かめるべく走って行った。しかし喧嘩はしておらず話しているのだが大きな声と今まで聞いたことのない発音なので、そのように思っただけな

のである。台湾では普通は閩南語びんなんごと言って、福建語に近い言葉を使っており、そのイントネーションにより、われわれ日本人には彼らが普通に話をしていてもうるさく聞こえるのである。

「サロン。」大きな声で主調事が呼んでいる。「はい。」俺はサロンルームに行くと、主調事からアコーディオン・カーテンでサロンルームの奥まったところを仕切って事務室代わりにするようにと言われた。むろんこの船にもスペアールームが1階に一箇所、2階に2箇所あるのだが、今回、一階のスペアールームはパーサーが特別に使っているの、急遽、停泊中ということで、サロンルームの一角を事務室に変えたのである。早速、水墨画の額縁が飾られ、四畳半ぐらいの事務室が華やかに、そしていかにも外国の雰囲気が出来上がった。しかし食事する場所はそのままでの食事をするのには別に支障はない。

いきなり船内放送でパーサーが「バンスが到着し、上陸許可証を渡しますので各自サロンに至急取りにきてください。」と放送したのでサロン・ルームがバンスもらを貰いに來る船員達で順番待ちになった。俺も一番最後だが2000元もらった。初めての外貨だ。これが台湾の紙幣か。蒋介石の顔が入っている。さー行くぞー。。。。

午前八時を回っただろうか、サロンルームには局長、キャプテン、セコンドッサー、サードッサー、チェンジャー、サードエンジャー、セコンドエンジャー、ファーストエンジャー、パーサーの順に入ってきた。今日の朝食は、納豆に卵と刻み葱を入れて菜箸で掻き混ぜ、それぞれの小鉢に分け、その上に青のりを振りかけウズラの生卵を乗せたもの、長方形のお皿には、ハジカミをあしらった焼いたアジの開きの干物と袋に入った味付け海苔、お椀はジャガイモを5ミリぐらいの厚さに輪切りにしたものと、これも同じく長方形のうす揚げを立てに半分に切り横に五ミリぐらいに切ったものと、水に漬けておいた2センチぐらいに刻んだ乾燥ワカメが入った煮干しだしの味噌汁、そしていつも通りの白菜の漬物とイカの塩辛。

もう荷役が始まっている為なのかそれぞれの顔が仕事モードに変わっており、お箸の動きもいつもと違い早々と食事を切り上げていった。

『ウィーン』とウインチの音が聞こえだし、クォーター・マスター、ボースンとセーラーたちがヘルメットかぶを被って表の方に向かっていった。俺も手を休めて表のほうに出て行った。表ではハッチおおを覆っていたポンツーン(Pontoon)と言われる鉄で造られた大きな蓋ふたが次々とブルワーク(Bull work=舷の防潮と水はけのための側鋼材)とハッチ・コーミング(Hatch Coaming=ハッチの縁材)の間に積み重ねられてハッチを開けているのである。俺は手早くサロンを掃除して皿洗いを済ませると、主調事がチャンバーからビ



ニールに入った冷凍のサバと羽を剥いた冷凍のニワトリ 2羽を持ってきて「サロン、昼はスパゲッティー・ミートソースにするから昼の仕事が終わったら3時まで外に行っていいぞ。」と言われた。なんという配慮だ。主調事を見直した。「サロン、今日の夕食を食べないやつを聞いとくんだぞ。」「はい分かりました。」

俺はオニオン、キャロット、ガッリック、キュウカンパー、キャベッジなどを野菜チャンバーに取りに行き、キャベッジ以外はみじん切りにしてミートソースの具を作り、キャベッジは千切りに、キュウカンパーは斜めにスライスしてサラダの準備を一時間もかけずにやり終えた。俺は自分なりにこんなに早くできるとは思わなかった。そしてお酢と砂糖、塩、胡椒とサラダオイルでフレンチ・ドレッシング(本式にはワインビネガー、砂糖、塩、ホワイトペッパーないしはブラックペッパー、オリーブオイル)も完成させた。オヤジと言えば主調事が昨日冷凍チャンバーから出しておいた牛肉の塊でミンサー(Meet Mincer or Meet grinder)を使って挽肉を作り、俺が仕込んでおいた野菜の具に塩、ナツメグ、胡椒を加え、炒めた後、大きな缶詰のトマトピューレでミートソースを完成させた。また常時作っている残った野菜、セロリや鳥ガラ、卵の殻を入れたストック・スープからスープを取り出し、そこに先程余らせておいたオニオンとキャロットを薄切にして鍋に入れ、そこにマギー・ブイオンと胡椒を入れスープを作ったのでこれで完成だ。あとは乾燥したスパゲッティーをボイルするだけだ。オヤジは寸胴の大きな鍋に塩を入れスパゲッティーを入れボイルし始めた。



ミート・ミンサー

あれもう11時25分だ。時間のたつのは早いもので、俺は急いで配膳を始めた。一番最初に入って来たのはやっぱりチェンジャーだ。「サロン、いよいよだの。パッセージの予定表を見たか？<sup>しあさって</sup>出向は<sup>おか</sup>明明後日の17時だつてよ。ゆっくり<sup>おか</sup>陸を見てきんしゃい。」「有難うございます。」「チェンジャーはどうされますか？」「わしの事はええんじや。ええ女子がわんさかいるけー、面白いから……。それから台湾には水牛の角や菊花木、紫檀や黒檀の置物なんかを<sup>ぎょうさん</sup>仰山売ってるぜ。」「チェンジャーは今日の夕食はどうされますか？」「俺は食うぜ。<sup>うち</sup>家に送金せないけんけー。」「分かりました。それから街はどっちですか？」「港の周りがみんな街や。だけどボン引きが多いから気いつけや。」「有難うございます。」

その後、<sup>おか</sup>陸に上がるためサードッサー、サードエンジャーが8~0だからか急いで食

事をして部屋に戻っていった。キャプテンやチョッサー、ファースト・エンジャーは処女航海の事もあり今日は陸に上がらないらしい。勿論チェンジャーも。セコンドッサー、セコンドエンジャーはワッチの後陸に上がるらしい。

サー上がるでー。俺も鼻歌を歌いながらサロンの掃除や食器を急いで洗っていた。「サロン、今日はどうするんや。」谷本が話しかけてきた。「ボースンが今日はがいにやさしんや。今日は朝が早かったから午後から休みなーて言いさってな。」「オッケー、俺と喫茶店でも探してお茶で飲もか？」

助かった、やっぱり初めての外国で、一人で陸に上がるのは心細いのだ。Tシャツにジーパンに着替えてサー上陸だ。

谷本は既にギャングウェイで待っていた。「お前、上陸許可証を持ってるか？」「当たり前や。」本船から降りて僅か100メートル程の所に税関の詰め所がある。俺らは順々に上陸許可証を税関員に見せると手で順々に次と言うような仕草をするので簡単に外に出られた。

なんだか生温かい空気が漂っている。やっぱり温帯だな、とか思いながら一番奥の軍艦が停泊している先を左に折れて橋を渡ると『珈琲廳』<sup>かーふゐいていん</sup>と書いてある店らしき所があった。一寸覗いてみることにした。すると、おばさんらしき女の人が手招きするのである。俺は「有<sup>よう</sup>没有<sup>めい</sup>珈<sup>か</sup>啡<sup>ひ</sup>？」「有<sup>よう</sup>、有<sup>よう</sup>、<sup>ちん</sup>請。私、日本語がわかるよ。殆<sup>ほとん</sup>どの本省人は日本語ができるよ。」

なーんだ、日本語が通じるんだと二人で<sup>つぶや</sup>呟きながら入ってみることにした。中に入ってみると何だ！昼間と言うのに薄暗いというより真っ暗なのだ。懐中電灯でカーテンで仕切られた所に入ると、ビニールの白いテーブルクロスが敷かれたテーブルと4脚の椅子がある。谷本と俺は対面になるように座り、コーヒーが運ばれて来るのを待った。暫くしてまたぞろ先程の中年のおばさんが懐中電灯をかざしながらコーヒーの入ったコーヒーカップとスプーンをお盆に載せて運んできた。テーブルには砂糖が有るのだが、砂糖と言っても湿気を含んだきざらの様な砂糖だ。ミルクは無し。彼女が持って来た懐中電灯の光で砂糖を入れスプーンで混ぜていると、かわいい小<sup>しやおちゐい</sup>姐<sup>ねえ</sup>が二人入って来て、それぞれの横の椅子に座ったのだ。



そして差し出されたコーヒーを飲んでみた。なーんだ、インスタントじゃないか！俺らはちゃんとした挽たての<sup>ひき</sup>コーヒーを飲みに来たのに……。まあいいや。それからおもむろに谷本はタバコを出しマッチに火をつけると、その光でかわいい<sup>しやおちえい</sup>小姐たちの顔が妖艶に見え、我々にキスを促す<sup>うなが</sup>格好を did したのである。それで谷本は完全にアウト。俺だって発情期のヤングである。双方ともむしゃぶりつき抱き合っ<sup>いっつき</sup>て、一時の時間を忘れていた。無論、珈琲廳である。それ以上の事は無かったのだが……。そして一人当たり50元(450円)ずつ支払って店を出た。



「谷もうこんな時間や。早う帰らな主調事からどやされるわ。」谷本と別れて本船まで急いで戻ることにした。

なんだこれ！俺がこんな事をしていいのか。俺は海外で商売したいために船に乗ったのに。まー、今日の事は今日の事。忘れることにしよう。

「サロン、大根おろしを作っといてくれ。」今日の夕食はサバの塩焼きと、おから(関東では<sup>う</sup>卵の花)、<sup>はまぐり</sup>蛤のおすましである。オヤジは冷凍ニワトリを不器用に鶏肉とガラに分け、肉の部分を2センチ角ぐらいに細かく切り分けていた。それが終わるとすぐに昨日冷蔵庫に入れて柔らかくなるまで戻しておいた冷凍サバを二枚におろし、それぞれ2等分にし、塩を振っていた。俺はと言うと、主調事に言われた通りに下ごしらえだ。刻んである乾燥シイタケをボールの中に入れ、戻すために水を入れる。こんにゃく、キャロット、をそれぞれ約3ミリ角の千切りにし、それを2.5センチぐらいの長さに切る。<sup>ねぎ</sup>葱(関東では分葱と言う)を細かく刻んでおく。もちろん大根おろしも。そして<sup>しらねぎ</sup>鰹だしを作る。また関東でいう葱で白髪葱も刻む。完璧！

暫くして主調事がやってきて、ガスを強火にし、大きなフライパンから煙が出る位まで温めたところにサラダ油を入れ、フライパン全体に油が行きわたるように傾けた上におからを入れ、鉄製の大きなお玉で掻き混ぜて水分を飛ばし、大豆臭さを無くすため、<sup>い</sup>煎り始めた。暫くして鶏肉、キャロット、を入れ同じように掻き回しながら温め、水で戻した干し椎茸を水(戻し水)のまま入れ、そこに味噌を入れアルコールを飛ばし、鰹だし、砂糖と塩、香り付けの醤油を少しだけ入れ、味を整えて葱を色添えに入れていた。一方ではオープンに入れた、サバの焼ける匂いがしていた。またオープンの上に乗せた、

砂を抜いた蛤に水を入れたお鍋はだんだんとアクが上がってきている。「おやじ！アクを取って味付けしろ。サロンは皿を並べろ。」主調事は何しろ手際が良い。メインのサバの塩焼きにはだいこんおろしとはじかみを。小鉢には卵の花を。蛤には塩と少しの醤油で味付けし、お椀に入れその上に白髪葱。「サー終わったぞ。」主調事が威勢よく言ったので戦闘開始。サー行くぞ。配膳、ライス・ボイラーからご飯を保存容器に詰め替えいつものポジションに立った。夕食も一番乗りはやっぱりチェンジャーだ。「サロン、可愛い小姐がいっぱいいるけー、ゆっくり遊んできんしゃいや。」またこの話かよー。まーいいや。チェンジャーは俺をからかって面白がってるんだから。「分かりました。チェンジャーは何で今日陸に上がらないんですか？」「俺だっていつも遊んでおる訳ないんじやから。今日は船具屋がくるけー、会っとくだけや。こうゆう時のセコンドが一番ええワッチじゃけー飯を外で食べるけんサロンも仕事が減っていいのう。」なんて言ったらいいんだろう。俺は遊びに来てるわけじゃなく外国を知るために働いていると言いたかったんだが・・・。

次はキャプテン。キャプテンはいつも無口でただ決められた時間に食べに来るだけだ。キャプテンはどうするのだろうか。俺にはどうしても聞けない。

今度は局長だ。局長は港内に停泊中は無線が使えないからいつも自由でお泊りも可能である。しかしいつも孤独な職業である。「局長さんはどうされるんですか？」「マーぶらぶらと歩くことじゃなー。」局長の仕事はほとんど座ってする仕事なので停泊中は体のためにぶらぶら歩いているらしい。

パーサーはあれ、いないぞ。パーサーは昼飯の後どっかに行ったらしい。パーサーにはこの基隆には昔からの遊び相手がいるらしい。

終わったぞ。かたずけたら俺もゴー・ショー(Go Shore=<sup>おか</sup>陸に上がること)だ！

俺は、早速 BOY と書かれた一段下の部屋に直行した。オヤジは飯をメスで<sup>めし</sup>食っているから、今の内だ。サロンで来ている服をそのまま下の段のベッドに脱ぎ捨て、ジーンに白の長袖のジャージ (Sweat=スウェット)、<sup>いっちょうら</sup>一張羅の靴に履き替え、時計はセイコー・ファイブだ。

ジャジャー。今度は一人でタラップ (Gang Way) を降り、海関(税関)のゲートの外に出ると、昼間と違って、なんだこのポン引きの数は！「マスター、いい娘<sup>こ</sup>がいるよ、安<sup>やす</sup>いよ。」「マスターどこ行く。」「マスター。」数十人いるだろうか、ものすごい数である。「いいよ、一人で行くから。」俺は彼らを見殺しして100メートル位、普通に歩いて行った。なに！まだぞろぞろ付いて来るではないか。今度は走った。また100メー



ル位。すると痩せこけた四十四、五の男一人だけが息を切らしながら付いて来た。「マスターお願いしますよ、いい娘、紹介しますから。」もうこうなったら走って撒くしかない。俺は走った。右に行ったり左に曲がったりして……。何時しか少し賑やかな所に出てきた。アー疲れた。まさかこんなにポン引きが沢山いようとは。少し疲れて果物で作ったジュースを売る店があったのでそこに入って、あまり綺麗でもないテーブル席に座ってストローでオレンジ果汁を飲もうとした瞬間に、先程の痩せこけた男が周りをきょろきょろしながら入ってきた。俺の顔を見るなり、「あいやー(哎呀)、マスター、探したよ。」息がぜーぜー言っている。

この店は開けばなしになっていて、奥のテーブル席には、十七、八の素直そうな女の子が微笑ましように緑とか赤色のジュースを飲みながら談笑していた。ぜーぜー言っていたポン引きがやっと落ち着いて来たらしく腰のベルト後ろに挟んだタオルで顔をふきふき「マスターあの子らの誰でも話をつけますから連れて行ったらいいよ。」ウッソー、まさかあの純情そうな女の子が……。絶対無理だ。「本当かい？嘘だろ。」「大丈夫です。マスター私に任せてください。」「ジャー、一番右の女の子。」まー無理だから……。もしOKしたらラッキーだと思



ながら様子を見ていた。その痩せこけたポン引きが一番右の女の子を連れて戻ってきた。ポン引きはちょっと私を店の脇に呼んで「すみませんがお礼に100元(900円)下さい。また彼女にも別れるときに100元やってください。お願いします。」と言ったので、「まー、いいや、はい、これ。」俺はポン引きに100元渡すことにした。

「私は『林 玉華』です。宜しく。」まさかこんな事があって良いものだろうか。俺のタイプの女がこんなにも簡単に手に入るものなのか……。

玉華は17歳、何の穢れもなさそうな少女である。と俺は思った。彼女は俺の左腕にしがみつき顔を寄せてきた。「食事はしたのか？」彼女は顔を横に振りまだだと言っているように俺の顔を見つめている。その顔の表情と言ったら俺も今まで見たこともない愛くるしさなのだ。「どんな料理を食べたいの？」と聞くと「日本の



料理。」「どこか知ってる店はあるの？」知ってるよと言うようになおも俺の顔を見つめながらうなずくのである。しばら かわらぶきの日本的な建物が並んだ中を歩いていくと屋台の様な所に入った。すると小母さんおぼのような女性が来て、「何がいいの、定食なら寿司や天婦羅、煮物なんかが付いているよ。これは90元だけど沢山あるから十分だよ。」「それでいいよ。」ちょっと高いと思ったのだが可愛い彼女の前だからそう言ったのである。しかしこの小母さんおぼも日本語が堪能だし、海外に来ている感じがしない。「なんで台湾の人は日本語がうまいの？」「全部じゃないんだけど……。台湾にはもともとから住んでいる本省人しょうかいせきと蒋介石が中国から連れてきた外省人がいるの。小母さんおぼみたいな年の本省人は日本の教育を受けているから、だいたい日本語が分かるのよ。だけど外省人は全く話せないの。私は外省人は大嫌い。外省人は私たちの仕事を奪って全部独占しているし、私らの事を屑くずみたいに思っているの。彼らで字が書けない人がわんさかいるのに……。私の父も彼らに殺されたの。二、二八事件と言うのが十年ぐらい前にあって、私らの権利を外省人に全部取られたの。」なんだろう、こんな若い娘こが俺に政治的な話をするのは。完全に彼らを憎んでいる。



このような話を聞きながら暫くしていると、先程の小母さんが「はい。どうぞ。」と言って料理を次から次へと運んでくる。それは直径約1、2メートルぐらいのテーブル1杯にである。

私たちの向かいの席に、七歳から十二歳位までの食べ盛りの子供3人とそのお母さんらしき人が、巻き寿司二皿をつつき合っている。玉華ゆいふあに向かいの親子にあげるような目配せをすると、彼女は首を振って、「お寿司は台湾の人々にとって贅沢な食べ物で、あのお母さんは精一杯のご馳走を子供たちに振舞っているの。そんなことをしたらダメ。」逆に俺が彼女に教わったのである。あまりの量に少しばかり残して店を出たのだが、またぞろ街を歩きだしたのである。「ねえ、私の家に行かない？少し汚いけど、いい？」俺は断らなかつた。

バラックみたいな家の扉を開き、黙って2畳ほどの部屋に入った。彼女の母らしき人が我々が帰って来たのを分からない振りをしているように編み物をしていた。彼女の部屋には吉永小百合の写真が貼ってある。そして日本語の本がたくさん並んでいる。また

部屋の半分をベッドが占領しているのである。我々はそのベッドに座りながら「私、日本に行きたいの。そしてこのような生活から抜け出して、お母さんを楽にしてあげたいの。」

俺はみすばらしい彼女の部屋を見ていると「そうなんだ。だけど台湾ほどではないけれど日本でも生活はそんなに楽じゃないよ。」彼女はこの台湾には何の魅力も感じていないように見える。彼女の夢は何としても日本に行くことだ。そうすれば全てが変わる。そしてお母さんに良い生活をさせられる。そのように彼女が考えているようだ。

彼女は急に悪戯<sup>いたづら</sup>っぽくおれの顔を見つめながら、おもむろに両手を大きく逆『ハ』の字型にあげて抱き付いてきた。もうアウトだ。やっちゃった！

帰りがてら、ポン引きに言われたように彼女に100元手渡した。「ねえ、なんであの人にOKしたの？」俺は尋ねた。「あの人はいつも私たち親子を心配してくれるの。お母さんは、お父さんが殺されてからいつもあのように世間を見ないようにしているの。あの人は『謝』と言う人だけど私に客を紹介してくれるの。私らは貧乏だけど、働く所が無いの。だからいつもあのジュース屋で待っているのよ。」「へー！俺が飛び込んだところが『謝』のネジロだったわけか。俺は必至でポン引きを撒いたつもりだったのに……。」

彼女は俺を港の近くまで送ってくれるという。『林 玉華』、彼女は100元の対価として最後まで男女の営<sup>いとな</sup>みをするのであり、それが『謝』への義理<sup>しや</sup>と考えているのか。しかし顔から肢体、肌までもほぼ完璧なこの少女には心の強<sup>かいま</sup>さが垣間見れた。彼女は自分の仕事が良い形で終わったので、またあの初々<sup>ういうい</sup>しい笑顔が戻ってきた。俺も自分の溜<sup>た</sup>まっていた者を全部吐き出したので腰がいつになく軽やかだった。半面、俺には自制心と言う物が有るのだろうか疑わしくなってくる。俺には好きな彼女が日本にいる。日本の彼女とは手を握った位でそれより外<sup>ほか</sup>の事は何もない。俺は台湾の彼女と手を繋<sup>つな</sup>ぎながら薄暗くなった夜道を港のほうまで歩いて行った。

「サロン、ガイな別嬪<sup>べっぴん</sup>さん連れてどげんしたのよ。俺は最悪だったぜ。ポン引きに連れられて女郎屋に行って、やっている最中<sup>てか</sup>に刑事のガサ入れよ。慌てて女郎屋の裏から逃げて来たよ。」谷本はいつも付いていない奴だ。「俺かい、何もしてないぜ。ただ彼女が本船の近くまで送ってくれると言うので一緒にいるだけよ。」

俺は彼女に目配りして別れることにした。「谷、いくらやった？」「300元よ、あほくさ。」「そやけど基隆という町はおもろいな。また明日も出るわ。ところでお前、飯食ったんか？」「飯、食ったかい？せっかく台湾に来たのにそんなん食っている暇なんかないぜ。サロンは食ったんか？」「彼女と一緒に寿司や天婦羅、食ってきた。」

話しているうちに本船のタラップの所まで来ていた。「じゃーな。」俺は本船の<sup>とも</sup>艦で余韻を楽しむように基隆の街を見ていた。表ではウインチの音が絶え間なく続いている。夜荷役だ。暫くして部屋に帰ったのだが、自分がまるで自分でないように覚える。人間っていう生き物は全く自分をコントロール出来ないのだなーと思う。

ここ基隆では売春が公に認められていて公共の売春宿があるらしい。しかしポン引きなどは、闇の売春宿を紹介してそこからキックバックを貰うようだ。『謝』はそれとは違って、貧乏な女の子に客を紹介して客から紹介料を貰うやり方だ。サー何も考えずに寝よう。しかしなかなか眠れない。もう忘れよう。こんな事では俺は変わらない。絶対に！人間と言う生き物はこうゆう物なのか？だが俺は違う、違うんだ、と思いながら『海の鷺』を読むことを考えた。なかなか面白いじゃないか。そうこうしている間に眠りについてた。

あっ！オヤジがいない、6時前と言うのにもうギャレーに行ったのか？早速歯を磨いて顔を洗い、いつものサロン姿に着替えてギャレーに直行した。あれ・・・誰もいないじゃないか。オヤジはどこに行ったのだろうか？下に行ってチャンバーを<sup>のぞ</sup>覗いてみてもいない。仕方なく主調事が毎日書いているメニューを<sup>のぞ</sup>覗いて、先ず水を張った鍋に『いりこ』を入れオーブンのバーナーに火を入れた。そして昨日研いだ米をライス・ボイラーに入れ、手首が<sup>く</sup>浸るか浸からない程度に水を張り、ボイラーの栓を開けた。すると主調事がイワシの干物と冷凍の鶏肉5羽を大きなザルに入れて入ってきた。サロン、親父は泊りだから朝飯は2人でやるぞ。サロンは大根おろしと納豆を作れ、それからウズラの卵を20個と薄あげ2枚と豆腐(豆腐と言っても一丁ずつプラスチックに入っており、真ん中を包丁で切ると丁度半丁ずつになって、容易に取り出せるタイプである)3丁を取って来い。今日の朝食は薄あげと豆腐、わかめの味噌汁、メインに焼いた干物のイワシ2匹ずつに大根おろしと味付け海苔だ。そして納豆だ。納豆には刻み葱と卵を入れ掻き混ぜ、ウズラ(ウズラの卵は包丁のねもとで細くなっている反対側の丸いところを削ると簡単に取れる)をのせる。前にも言ったように、このほかに、白菜の漬物、イカの塩辛は毎日大きな容器に入れて出している。

「サー並べようぜ。」主調事の指示通りに皿を並べ、盛り付けた後から順にサロンと、メスに配膳をする。そしてライス・ボイラーから先程炊いていたご飯を両方の保温器に入れる。茶瓶に番茶を入れ、パントリーの湯沸かし器(我々が通常使う湯沸かし器と違い、タンク式になっている)からお湯を入れ、同じくサロンとメスに置いた。

「サロン、昨日は陸に上がったんか？」またチェンジャーだ。「上がりましたよ。」「どぎゃんだった？かわいい小<sup>しやおちえい</sup>姐に当たったかい？」「はい、台湾の女の子も可愛い子が



いますね。昨日は寿司や天婦羅を食べに行ったけどものすごく安いでびっくりしました。チェンジャーは今日上がるんですか？」「ああ上がるで、サロンも一緒に行くか？」「いや、止めときますわ。」チェンジャーと上がったらどんな所に連れていかれるか分からないからこのような返事をした。しかしチェンジャーは俺の事を、<sup>ただ</sup>唯からかっているだけだと思ったのだが、俺の事が可愛いとでも思っているのだろうか？

チョッサーも入ってきた。「サロン面白かったか？」「ハイものすごく面白かったですわ。」にこっとしていた。「チェンジャー、新船はいいですなー。蒸気ウィンチじゃないけん、荷役がスムーズで。チェンジャーの方は如何ですか？」「そりゃー新船じゃけん、ダイナモ(Dinamo=も発電機)もええし、暫くはピストン抜き(エンジンのピストンをシリンダーから抜いて煤や金属片を取り除きいてピストンとシリンダーの摩擦を減らすための掃除をする事)もせんでええけん、楽じゃ。チョッサーは今日は上がられるのですか？」「チェンジャーは人が悪いんじゃけん……。分ってることは聞かんでええじゃろ。」チョッサーも笑みを浮かべながら少し照れていた。セコンドッサーはその後入って来たのだが、上司の手前、黙って食べていた。チョッサーが「セコンドッサー、荷役が結構順調じゃけん予定通りに出港できそうじゃな。一雨でも振って一日でも出港が伸びればよかけんと思ちよっておりそうじゃのう。」「いや、そんな事ないっすよ。」セコンドッサーは四国出身でなく富山の水産高校出身なので、すごく気を使っているようだ。

そうこうしているうちにサロンの食事が終わったのでサロンを片付けた後、部員の食事が終わったメスで食事をしていると、オヤジが帰ってきて、ぱつが悪そうに「サンキュー。」と言って下の二人部屋に降りて行った。

メスの皿洗いが終わってに背伸びをしながら艫に出てゆくと、コーターマスターの白井さんが<sup>とも</sup>艫で、<sup>おか</sup>陸のほうをぼ〜と眺めている。俺も彼のそばの方に行って「白井さんは何故いつも艫にいるんですか？」と尋ねていると「わしのガキや娘たちが大人になった時の事を考えるんじゃ。その時になったら、小さな船を買って、釣りをしながら田舎で毎日のんびり暮らそうと思とるんじゃ。俺はあんまり社交的じゃないけん、釣りが一番好きじゃ。高知の中村はいいぞ。何も無いんじゃが山が海の側まで来ちよって、しかも水がおいしゅうて……。それからサロン、昨日はどうした？」「面白かったです。なんしか外国は初めてやから、びっくりする事ばかりですわ。」「それからサロン、これから女とやる時があると思うから言っとくけど、サック(コンドームの事)が無い時はやった後、必ず袋しょんべんをするんぞ。」「袋しょんべんてゆうのは何ですか？」「それは皮の所を引っ張ってつまんで小便するんじゃ。それで溜まった時にぱーっと放すんじ

や。」そしてあそこをきれいにするんじや。」「へー……。」「お前はあまり知らんけ一。何でも<sup>お</sup>教<sup>お</sup>せたるけん。」

あれっ、オヤジがもう仕込みを始めている。キャロットは鍋に砂糖と水を入れた鍋でボイルしている。ブロッコリーは少し塩を入れてボイル。マッシュポテトはドライのフレークにお湯を入れ練り上げ、バターとミルクを少しずつ入れ、塩と胡椒で味を調べていた。少しして主調事がギャレーに入って来て、醤油、味醂、おろしにんにく、おろし生姜、おろし玉葱を大きなボールに入れて掻き混ぜ、そこに4等分にした鶏肉を漬けた後、また CHIEF STEWARD と書いた部屋に戻って行った。主調事は船食(Ship's Chandler)に注文する食料などを書き出しているらしい。船員には、海員組合で決められた最低限の一人当たりの予算があつて、日本で注文するよりは海外で注文するほうが安い場合が多いし、海外の船食もそれをあてに主調事を接待したり、贈り物を届けたりする場合があるので、悪い主調事に当たれば、食事が質素になる場合があるそうだ。この時代、全日本海員組合は単一労組では日本で最大であり、一人当たりの最低限の食事と言っても結構贅沢に決められていたのである。でもこの主調事は人気があり船員から信頼されているのである。暫くして主調事が戻ってきて暖められたオーブンの皿に先程の鶏肉を入れ焼きだした。ニンニクのおいしそうな香りは早く食べたいという欲望<sup>こと</sup>を<sup>さら</sup>更<sup>さら</sup>そ<sup>さら</sup>るのである。「サー、皿を並べてくれ。」この日もスープはコンソメである。コンソメ・スープはマギー・ブイオンのおかげで随分と楽になったようだ。

今日は谷本も仕事をしている。俺も今日は夕食後に出かけようと思う。

最近<sup>最近</sup>はサロンの仕事に余裕ができ、大体の事が分かる様になってきた。夕食の片付けが終わった後、谷本と繰り出すことにした。

今日も基隆の空はどんよりとしている。ポン引きは彼らの縄張りがあり、一度付いた客には手出しが出来ないらしく、『謝』がいたのだが今日は要らないと言うと、あまりしつこくしてこなかったのが街中をゆっくり見学出来るようになった。「谷、今日は女<sup>かおしゅん</sup>買<sup>か</sup>い<sup>い</sup>に行かないのか?」「高雄も有るからのう。サロンは何処へ行こうと思つとるね?」「俺は街を歩いて基隆のいろんなもんを見たいや。初めての海外やから。」「サロンは真面目過ぎるけ一、俺はいつもボースンに比較されるんじや。まーええーちゃ。」

街のネオンや、看板が点灯され始め、日本でよく聞いた城卓也の『骨まで愛して』の曲が中国語か福建語か分からないのだが大きなボリュームで流されている。俺は谷本を誘ってレコード屋に入ることにした。なんだこりゃ、日本のレコードや、カセットテープが店内の半分近くを占めている。「すみません、今台湾で流行<sup>は</sup>っ<sup>や</sup>ている歌手は誰ですか?」と聞くと「彼女だよ。」自慢げに鄧麗君<sup>とんりーちん</sup>(のちの日本での名前はテレサ・テン)

のカセットを持って来た。それを買って店を出たのだが、その後の日本でこんなに有名になろうとは思ってもいなかった。彼女の声は若い時から澄んでいて非常に魅力的だった。その後、土産物屋に行くことにした。土産物屋では紫檀(Rose Wood)、黒檀(Ebony)の彫り物に加え、菊花木のコースターとか灰皿が並べられ、最も俺の目に焼き付いたのが水牛の角である。黒い水牛の角は左右が中心の木部に差し込まれ、その木部の上に赤い布が巻かれており、左右に張り出した角には農村などの景色が彫り込まれている。水牛などを見たことのない俺には、大きな床の間のある家であればきっと飾ったらと見栄えがすると考え、先輩への贈り物に最適だと思い、買うことにした。台湾の土産物屋では値切るのが当たり前であると聞いていたので、元値は500元であるが300元に値切ったのである。無論、いろんな物を買いたいのだが、お金が続かないのである。しかし、この水牛の角は街歩きには最悪である。だけど時間ももったいないので、しばらく歩いていると、肉屋に出くわした。なんだこの肉屋は！肉を塊のまま台の上に並べていて、端のほうは少し乾いていて変色しているうえに蠅がたかっている。陳列ケースに入れられて、冷却パイプで冷やされてスライサー(Slicer=薄切りにする道具)で薄切りにされて部位ごとにバット(Vat=容器)に入れられ、並べられている日本の肉屋と違って、露店で客が来たらでかい中国包丁でぶった切って売っているのである。この店だけかと思ったら、どの店でもある。何？向かいの店では鶏が生きのまま売られているのではないか！そこにいた客も二匹を買っていて、その二匹の足を一纏めに縛りぶら下げている。俺は見てもいけないものを見たような気持ちにさせられた。しかし彼らは至って元気のある、例の喧嘩でもしているかの大声で話しながら店主と駆け引きをしているようだった。この時やっと、外国に来ていることが自覚できたのだ。やっと港の近くに来て、谷本と俺は、何か名残惜しいので露店のような店で『黒松』と書かれたジュースらしき物を買って本船に戻った。

「谷、メスで飲もうか？」「OK。」「俺は「ブラックニッカを持ってくるからお前はなんかつまみを持ってこいや。」

メスではボースン(Boatswain=甲板長)もコーター・マスターの河合さんと既に一杯やっていた。「おー、谷か、今日は早いなー。女買いでもいっちよるかと思ってたら、どぎゃんしたんか？」「内地に行ったら山本に金返さないかんけん、それと。高雄もあるけー、金使われんけん。」「そーか、まー飲めや。お前は宇和島には彼女がいるんか？たまにお前の家に行ってもいつも居らんけー。」「いたらこんなに遊ばんぜよ。ボースンが来るんじやったら電話でもしてくれれば良かったのに…。家



に居<sup>お</sup>っても誰もおらんし、仲間はみんな働いているし、釣りぐらいしか無いけー。夜は夜で誰も居らんけー近くのスナックで飲むぐらいしか……。「お前は結構寂しがり屋じゃのお……。家に居<sup>おつめん</sup>て乙免の勉強をしとかな俺みたいになるぜー。」

「ボースン、俺はボースンみたいになりたいけん。俺みたいな者<sup>もん</sup>はそれで十分じゃが。もーそーゆう事は言わんで。ボースン、飲みましようぜ。」人のいいボースンは酒が入るといつものように谷本に説教するのだが、ボースンの気持ちが痛いように分かるのである。

「谷、宇和島ではどんな魚が釣れんの？」俺は助け舟を出した。「ま一季節によって違うんじゃが、今の季節ならイサキかの一、うりぼーもええが、やっぱりデカいやっちゃ、いや宇和島は真鯛じゃ、宇和島の名物は鯛めしじゃけん。それから鱻<sup>あじ</sup>じゃな。グレも。けどなー、それも暇つぶしなんじゃ。サロンみたいに頭が良かったらワシだって勉強しちよるで。」

「お前は阿保か！俺だって勉強は嫌いや。そやけど夢のために本を見たり、調べたりしてるだけやど。お前は宇和島が嫌いか？俺は東大阪の枚岡が好きや。秋祭りで10月14日から16日までやけど、枚岡神社は官幣大社や。若い衆は挙<sup>こぞ</sup>って太鼓台という1000貫ぐらいある布団太鼓を担いで急な坂道を登っていくんや。俺みたいな背の高い男は損や。ちっこい奴らは担<sup>かつ</sup>がんとぶら下がってるんや。肩から血<sup>にじ</sup>が滲んで来るんや。内出血やない。外出血や。それを踏ん張って登っていくんや。俺はこの祭りがほんまの日本一やと思う。どっかのだんじり祭りなんかは子供騙<sup>だま</sup>しや。枚岡はコンクリート建築用の伸線、それから工具では日本一やて思ってるんや。宇和島はなんで有名や？」

「サロン、宇和島を馬鹿にしーさんな。真珠てゆうたら伊勢志摩の英虞湾やと思うけど、宇和島が一番多いんじゃ。ハマチの養殖もじゃ。それから松山のじゃこ天なんかまずーて食えんぜ。」

「おい、みかんもじゃ。それから山下新日本汽船も宇和島からじゃ。井関農機も伊予は出身じゃ。わしらは伊予でも伊達藩(宇和島は伊達藩の分藩である)の宇和島じゃ。」ボースンも参加しだした。「この船の宇和島出身の連中は、船員をやめたらみんな宇和島に帰りたいんじゃ。お前は機帆船に乗っとる連中や漁船乗りを馬鹿にしとるけど田舎に帰って見んしゃい。オッサーとコーター・マスターはおんなじ人間なのに扱いが違うじゃろ。みんな商船に乗って、オッサーかエンジニアになって錦を飾るのが夢なんじゃ。お前がそんなんじゃったらそれなりの嫁さんしか来んけー。」

「ボースン、今はそんな時代じゃなかるー。俺なんかはいくら頑張っても大した事ないけん。」

「そりゃそう思うのも無理はないんじゃが。谷には俺みたいな道を歩んで欲しゅうないんや。分るか？」

「ボースンと飲んでたら酒がまずーなるけ

ん、俺寝るわ。」谷本は部屋に帰って行った。「サロン、あいつを頼むわ。俺がゆうても応えんけん。」「ボースン、俺には谷の気持ちが少しは分かります。あいつは一才やけっぱちになってるところが有るのも分かるんです。そやけどあいつはあいつ。そのうち変わると思います。」「サロンはほかの連中と、一寸違うな。なんか意志が固いし、そうやが、ガイに人なつつこいし。オッサーの連中もお前の英語には舌を巻いとったぜ。」「俺は少しばかりの英語が出来ても、偉いと思ってません。アメリカの馬鹿でも英語を話すし、中国人の馬鹿でも中国語を話すし。要は中味やと思うし。俺は運動しかできん人間ですよ。俺は大学を滑ったあと、水泳のコーチになれへんかって誘われてたんです。ほんで就職先が決まったと思ってたらオリンピックの金メダリストも来るって言うんです。給料は俺の2倍、コーチの経験もないし年齢も俺より若いんです。考えたらオリンピックの選手がコーチで来るんなら生徒もたくさん集まるのは、冷静に考えたら分かるんですが、ムカついてこれからは頭で勝負と思ったんです。」「俺も谷と一緒に中身はないんです。そやけど夢だけは大きいです。俺は何でもやってやると思ってるけど、谷の場合は家族の事を考えたら無理もないと思います。少し癒しの時間が必要だと思うんです。」「そやなー、母親がいつも酔っぱらって帰ってくるけー、奴の居場所が無いんじゃ。」「俺は谷が好きなんです。人を疑わないあの馬鹿さが好きなんです。俺らの前では喜怒や哀楽を正直に出すし、人に頼まれれば何でもしてくれるし、結局寂しがり屋だと思っんです。ボースンもそこが可愛いから心配してると思うんです。」「そりゃそうだ。あいつが可愛くなかったら、何も心配なんかせんぜよー。」

このような会話が續いて、俺も酔いが回って来たのか部屋に帰って寝ることにした。

あれ〜。ウインチの音がしない。朝の6時前なのでサロン服に着替えてデッキを見てみた。ステベーがないし、ポンツーン(Pontoon=ハッチの鉄でできた蓋)でハッチ(Hatch=艙口)が閉められ、ターポリン(Tarpaulin=水を弾くカバー)が掛かっている。そして雨がしとしと降っている。どうしたんだろう。ちゃぶタイム(Tea Time)にしてはステベー(Stevedore=沖仲仕)もないし……。おかしいなと思っしたが、ギャレーの方に向かう事にした。例のように朝食の準備を終えサロンでスタンバイしているとチョッサーが一番に入って来て、「サロン、ノック・オフやけん、出港は明日の6時の予定になったさけー。今日の夜は遊んで来さい。」「チョッサー、ノックオフって何ですのん?」「あーそーか、ノックオフ(Knock off)ちゅーのは荷役の中止で言う事や。雨が降ってるけん、貨物が濡れたらいけんけん中止になったん

じゃ。」「へー、ノックオフって言うんですね。全然知らなかったです。学校でも習わなかったし。」「サロン、わしらが運んでるのは雑貨じゃ。その中にはセメントもあるし、鋼材もある。雨が降ったらセメントは固まるし、鋼材は錆びるんじゃ。それで港では、ステベ―殺すにゃ刃物は要らぬ、雨の三日も降ればよいてな。ステベ―は日雇いが多いからじゃ。それと基隆という町は昔から雨の基隆とってな、雨が多いんじゃ。じゃけん、遊びに行ってきたな。」

俺は少し悩んだ。あの玉華<sup>ゆいふか</sup>の顔が浮かぶ。止めておこう。基隆には次の航海がある。その時に会えばいいじゃないか。よーし、今日は止めておこう。何故こんな事で俺は悩んでいるんだろう。俺の夢はこんな事事で揺らぐものではない。まずはこの基隆の人々の生活を見てみよう。そして日本との歴史的な繋がりを調べてみよう。まずはこれからだ。

昼飯が終わって片付けをしていると、急にけたたましいサイレンの音が鳴った。

エプロン (Apron=本船の側の貨物を積んだり下ろしたりする場所) を歩いている作業員や税関の周りに居たポン引きまでもが一斉に散らばって、見えないように建物の下に隠れたのだ。ちょうど艙にいたコーター・マスターの白井さんに訪ねてみると、「あれは空襲警報で、演習や。たまにあるんじゃ。台湾海峡を挟んで中共と睨<sup>にら</sup>み合っているからな。サロン、もし外で空襲警報が鳴ったら、すぐに隠れるこっちゃ。もしそのまま歩いてたら逮捕されたり、場合によっては撃ち殺されても仕方ないからな。」「へー、台湾て怖いところですね。」「そうや、台湾はいつも臨戦態勢やからのう。」「まー、演習やから。サロンは今日はどうするんか。」「基隆の街を歩きます。」

俺は夕食の後かたづけの後、ジーパンとTシャツで傘を持って出かけることにした。

不思議なことにもうポン引きは付いてこなかった。小雨降る基隆、何だか戦前の日本、勿論俺は生まれていなかったのだが、ノスタルジックな雰囲気<sup>ふんいき</sup>に浸りそう。街は屋台が所狭しと並び、例の閩南語<sup>びんなん けんそう</sup>の喧噪<sup>けんそう</sup>とした雰囲気がむんむんしている。俺はいつの間にかその雰囲気にのまれて焼きそばに似たものを注文していた。味が想像できるものを注文していたのである。うまい、実にうまい。日本では想像できない味なのである。一緒に差し出されたお茶を食後に飲んでみると、近くのレコード店から大きな音量の歌が聞こえてくる。

すごく透き通った声である。屋台の小母さんにだれが歌っているのと聞いたら、鄧麗君<sup>とんりーちん</sup>(のちの日本での名前はテレサ・テン)だとの事。まだ17~8歳だ。レトロな



感じで、台湾の人からは愛されているようだ。戦前と終戦直後の日本が同居しているようで貧しさの中に何故か郷愁のようなものが感じられた。その屋台を出て、ネオンの灯るほうに歩いていると、一昨日水牛の角を買った店に通りがかったので中を覗いてみると、「いらっしゃい。今日は何を買われるのですか？どうぞ、どうぞ。」すごく愛想がよくなっている。「通りがかったので……。」紫檀や黒檀の彫刻を見ていたら、「これらは水に漬けたら沈んでいくのですよ。ですから重くて硬いのです。普通の木と違って値段も高いし。」「へー！今迄水より重い木材なんてお目にかかった事もなかったのだが。」

後で知ったのだが、黒檀(Ebony)はピアノの黒鍵、バイオリンやギターの指板、カスタネット、そのほか、仏壇や、仏具、高級家具などに用いられる。また、紫檀(Rose Wood)もエレキ・ギターの指板、仏壇、仏具、高級家具などに用いられているとの事だった。戦後の貧しい世代に育った、俺たちは知らないのが当たり前なのだ。時間も遅くなったので本船に帰る事にした。『玉華』には後ろ髪を引かれる思いだが、今回は俺の理性が勝ったかな……？ 帰る道にはバーらしき所が数カ所あったので、急に谷の事が頭をよぎり急ぎ事にした。案の定、谷はまだ帰っていなかった。明日は、高雄だ。部屋へ帰って、パジャマに着替えたら急に睡魔が襲ってきた。